

20190901 内容更新

人物	概要
アイゼンバーグ	共感には他者に対して向けられる 共感的関心 と、自分自身が感じる 個人的苦痛 との2つの側面があるとし、両者をあわせて 共感関連反応 とよんだ。
ヴィゴツキー	子どもが自力で解決できる水準を現在の発達水準とし、これと、自力では解決できないけれど、他者からの援助があれば解決できる水準との間を、 発達の最近接領域 とよんだ。 また、子どもは最初、主に他者とのコミュニケーションに使われる音声言語である 外言 を用いるが、やがて自分自身の頭の中で話したり考えたりする言語である 内言 に発展するとした。
ウォーク	視覚的断崖 において、乳児の三次元的な知覚の発見をした。ギブソンと研究を行う。
エクマン	社会生活のある場面でどのような表情の表出が期待されるかに関して、文化により異なる規則があると考え、これを 表示規則 とした。 基本情動 として、 喜び、驚き、おそれ、嫌悪、怒り、悲しみ の6つを示した。
エインズワース	新奇場面法 （ストレンジ・シチュエーション法）で、乳児と母親との実験を行った。それにより、 「 回避型 」「 安定型 」「 両価型（アンビバレント型） 」「 混乱型 」の愛着のタイプを報告した。
エリクソン	8つの発達課題 を提唱した。 「 基本的信頼感 」対「 不信 」 「 自律性 」対「 恥と疑惑 」 「 自発性 」対「 罪悪感 」 「 勤勉性 」対「 劣等感 」 「 自我同一性（アイデンティティ） 」対「 同一性拡散 」 「 親密性 」対「 孤立 」 「 生殖性 」対「 停滞 」 「 自我の統合 」対「 絶望 」
岡本夏木	子どもが身に付ける言葉を、 一次的言葉・二次的言葉 とした。
ガードナー	多重知能理論 として、知能を「 言語的知能 」「 論理—数学的知能 」「 空間的知能 」「 音楽的知能 」「 身体的—運動感覚的知能 」「 対人的知能 」「 内省的知能 」「 博物的知能 」の側面でとらえた。
ギブソン,E.J	視覚的断崖 を使い、乳児の三次元的な知覚の発見をした。 ウォーク と研究を行う。

人物	概要
ギブソン,J.J	環境の意味や価値は、環境から受け取った情報に基づき私たち自身が見いだすものではなく、 環境自体 が、はたらきかけられるべき意味や価値を子どもの側に提供しているのだ、という考えを アフォードンス とよんだ。
キャッテル	因子分析法により、知能を 流動性知能 と 結晶性知能 に分類した。 流動性知能 ＝新しい環境に適応したり判断したりする際に必要な認知能力。処理能力、直観力、規則性を発見する能力など。 結晶性知能 ＝過去に学んだことや経験などによって得た知識や判断などによる認知能力。言語能力、理解力、内省力、コミュニケーション力など。
キャンパスなど	ギブソンの作った 視覚的断崖 の装置を使い実験を行う。 また、生後9～10か月ごろ、はじめてであったものに対し判断がわからないとき、養育者の表情や様子を参考にして、物事を判断して行動することを、 社会的参照 とよんだ。
鯨岡峻・和子	養育者が子どもの存在や気持ちがあるがままに受け止めることが、子どもの自信や自己肯定感、相手への信頼感を育てることにつながると提唱した。
ケーガン	子どもの気質は、「臆病」や「怖がり」より、「大胆」や「物おじしない」という気質の方が幼児期から児童期にかけて維持されるとした。
ケーラー	チンパンジーによる 洞察学習 の実験を行った。試行錯誤して解決するのではなく、洞察（ひらめく）ことによって問題解決をするという思考を提唱した。
ゲゼル	一卵性双生児による実験研究。本来もつ能力の内的な成熟のためには、その訓練や学習を受け入れるために最もふさわしい心身の準備性（ レディネス ）が出来上がるのを待ち、そのうえで学習や訓練などを行うのがよいとした。
ゴールドスミスとキャンパス	乳児の 気質 について、 情動表出 の強さや持続時間という切り口で研究をした。
コールバーグ	道徳性を正義と公正さであるとし、児童から成人をも含む 道徳性の発達段階 を提起した。
コンドンとサンダー	新生児は、人が話しかけるなどすると、その発話のリズムに合わせて身体の一部を動かす 同期行動 （ エントレインメント ）を示すことを実験した。
サーストン	多因子説によって、言語理解、語の流暢性、数、空間的能力などの 7つの基本的認知能力 を提唱し、知能を、本能的な調整を抑制する能力や、それを個人の利益になるように行動を変える意思の能力などとした。

人物	概要
佐伯胖	人が新たな世界(they)とのかかわりを作り出し、広げていくためには、You 的な他者の存在が不可欠であるとする、「 発達 の ドーナッツ論 」を提唱した。
サメロフ	親の働きかけと子の個性において、それぞれに対しての影響の与えあいを「 発達 の 相乗的相互作用モデル 」によって説明した。
ジェンセン	環境閾値説 ＝「 発達 において、身長や知能といった遺伝的な形質が現れるには、一定以上の環境的な条件が必要で、どの程度の環境が必要かは、その形質によって異なる」
シュテルン	輻輳説 ＝「 遺伝的な要因 と 環境的な要因 の両方があわさることで 発達 が決まっていく」
シュトラッツ	発達 の周期性として、 体重 の増加が著しい「 充実期 」と、 身長 の増加が著しい「 伸長期 」が交互に現れることに注目し、それを7段階に分類した。
スピッツ	乳児の対象関係における指標の一つとして 3か月微笑 (社会的微笑)と、 8か月不安 を提唱。また、母性的養育者の喪失体験が、乳児に依存性うつを引き起こすことを明らかにした。 施設収容児にみられる心身の発育障害、自発性減退などの情緒障害や対人関係障害等を詳しく観察し、 ホスピタリズム を指摘した。
セルマンとバイロン	他者の感情を推察あるいは考えを類推して自分に期待される役割を理解しふるまえるようになることを 役割取得 といい、2人はこれを、母親など特定のだれかだけでなく 他者の視点 までを考慮する 社会的視点取得能力 である、と考えた。
ソーンダイク	猫の問題箱の実験により、学習者は 試行錯誤 によって問題解決に導くと提唱した。
トールマン	ネズミの迷路の実験により、学習者はすでに定着している潜在意識があり、報酬などをきっかけにその意識が顕在化され、能力を発揮するという 潜在学習 を提唱した。意識が顕在化していないときも学習していることを潜在学習とした。
ドナルド・ショーン	専門家について、学問の理論や知識を実践にあてはめて効率よく合理的に反復して行動する専門家を「 技術的熟達者 」、不確定な状況の中で思考しながら判断し、実践の中での自分の理論からみて振り返りを行う専門家を「 反省的実践家 」という専門家像を提唱した。
トマスとチェス	子どもの 気質 を9つの特性で分類し、「 扱いやすい子 」「 扱いにくい子 」「 立ちあがりが遅い子 」の3タイプに分類した。
トレヴァーセン	子どもがもつ、生後5～6週間ごろから、養育者が自分に対し関心をもっているかどうかを判断する能力を 間主観性 とよんだ。

人物	概要
ニューガーデン	老年期を、老年前期、老年後期、超高齢期に区分した。さらに老年期の適応の視点から、パーソナリティを「統合型」「防衛型」「依存型」「不統合型」に分類した。
パーテン	幼児期の遊びの形態の分類を、「目的のない行動」「一人遊び」「傍観」「平行（並行）遊び」「連合遊び」「協同（共同）遊び」とした。
ハーロウ	アカゲザルの実験において、針金製と柔らかい布製の「代理母親」を用意し、愛着形成にとって、スキンシップが重要な要素になることを示した。
バスとプローミン	行動遺伝学的な視点から、気質は後の人格形成に影響するとし、情動性、活動性、社会性を気質として考えた。
パウアー	愛着を、母子のようにある特定の間関係の間にだけ通用するコミュニケーションの成立であると考え、これが人見知りの要因になるとした。
ハヴィガースト	生涯を乳幼児期から老年期までの6つの段階に区分し、ある段階から次の段階へ進むために発達課題があることを提唱した。
バルテス	生涯発達心理学の概念を提起し、定着させることに貢献した。
バンクスとサラパテク	2人の実験により、奥行き知覚は、生後3か月ごろには可能になり始めることが示された。
バンデュラ	内発的動機づけは、自分はこのままでならやれるという確信である自己効力感（セルフ・エフィカシー）をもつためにも重要な要因であるとした。また、学習の成立において、本人の直接経験は必ずしも必要ではなく、他者の行動を観察することにより観察学習（モデリング）が成立しえるとした。
ピアジェ	認知発達理論として、人の発達には「感覚運動的段階」「前操作的段階」「具体的操作の段階」「形式的操作の段階」の4段階があると提唱した。
ファンツ	選好注視法で、乳児の注視時間を調べ、人間は誕生後のごく初期から視覚刺激の見分けが可能であり、人間の顔に対する明らかな好みがあることを示した。
フェスティンガー	社会的比較過程の理論を提唱し、人は自分より劣った人物に対する下方比較や、自分より優れた人物に対する上方比較を行うことを示した。
ブラゼルトン	新生児のガラガラや光などの刺激に対する反応を評価することにより、新生児行動評価を考案した。
ブリッジス	情緒の分化を、新生児から2歳まで分類した。
ブルーナー	自分自身の内部からの欲求が行動の動機となることを内発的動機づけとよんだ。

人物	概要
プレマックとウッドラフ	「心の理論」という言葉を「チンパンジーには心の理論があるのか」という論文ではじめて使った。
フロイト	心の構造には、イド、エゴ、スーパーエゴの3要素を想定した。また、0歳～12歳の子どもを口唇期、肛門期、潜伏期に分類した。
Bronfenbrenner	人を取り巻く環境を、生態学的システム（マイクロシステム、メソシステム、エクソシステム、マクロシステム）という同心円構造と、システムの平面に縦方向としてのクロノシステム（時間）からなるモデルで説明した。
バイラーソン	実験により、子どもはものの永続性を生後5か月半に認識しているとした。
ボウルビィ	<ul style="list-style-type: none"> 特定の対象との間に形成される特別な情緒的な結びつきのことを愛着（アタッチメント）と名付けた。 初期経験としての乳幼児と養育者との親密で継続的な人間関係が欠けている状態を、母性剥奪（マターナル・デプリベーション）とよんだ。 「他者は信頼できるものであり、自分は他者に大切にされる価値のある人間である」という、自己と他者についての確信である「内的ワーキングモデル」をもつと考えた。
ポルトマン	人間の子どもは、十分に発達が進んでいない状態で未熟なまま生まれてくるため、母親をはじめとする養育者に長く依存することになることを生理的早産とよんだ。
ホワイト	学習や経験によって備わっている潜在能力を活用して、みずから問題を解決し、環境の変化に適応していく能力をコンピテンス（有能感）とよんだ。
マーシア	エリクソンの研究に基づき、アイデンティティを4つに分類（アイデンティティ達成、フォークロージャー、アイデンティティ拡散、モラトリアム）した。
マズロー	欲求階層説として、生理的欲求→安全の欲求→所属と愛情の欲求→社会的承認の欲求→自己実現の欲求の段階を示した。
マッコール	親子関係は、出産直後の初期接触などによって決定づけられるのではなく、時間の流れの中での相互の交流によって築かれるとした。
メルツォフとムーア	実験により、ひとは目で見た情報を自分の表情として表出するような仕組みを生得的にもっていることを発表した。
モレノ	社会的集団の構造や機能に関する理論であるソシオメトリーを提唱した。
ユング	心を幅広いイメージの力動的体系にとらえ、集合的無意識と個人的無意識の中心に自己をおいた。内向・外向の心理的類型論、コンプレックスの概念でも有名。
ライカード	仕事を引退した男性のパーソナリティの分類を、「円熟型」「安楽椅子型」「防衛型」「外罰的憤慨型」「自罰型」とした。

人物	概要
ルイス	<ul style="list-style-type: none"> ・生後3年間の感情の発達について、人は生後すぐに満足、興味、苦痛を示し、3か月ごろまでに喜び、悲しみ、嫌悪を、4～6か月あるいはそれ以降に驚き、怒り、おそれの感情を示すようになるとし、これらを一次的（基本）感情とした。その後1歳代後半ごろ、はにかみ、うらやみ、共感、さらに3歳ごろには、それらに加えて、誇り、恥、罪悪感などがみられるようになるとした。 ・誕生したときからさまざまな人との間に質の異なる人間関係を結んでいくことが、愛着関係が生まれることにつながるという説を提唱した。
ルイスとブルックスガン	自分に対しこういうものであるとする客観的な自己の認識を、乳児に鏡にうつった自身の姿を見せる実験で検証した。
レイチェル・カーソン	自然との関わりの中で、未知なものに驚いたり、美しいものに感動する経験を「センス・オブ・ワンダー」と名付けた。
ローレンツ	カモなどのひな鳥が、卵からかえって最初に目にした動くものを親とみなして追従し（愛着行動を示し）、それが成長してからも恒久的に続くという現象を発見し、インプリンティング（刷り込み・刻印づけ）と名づけた。
ロスバート	生物学的プロセスを細かく追及し、気質について、反応性と自己制御性があるとした。
ロッター	自分の成功や失敗の原因を自分自身にあるとし、その成功や失敗をコントロールできると考える尺度を測るロッター-E スケールなどの各種テストを考案した。
ワトソン	環境説＝「発達には、生まれた後の経験という環境的な条件によって決められていく」
ワロン	フランスの児童精神科医。『児童における性格の起源』、『行動から思考へ』などを記した。

